伊達な
国際交流員のつれづれコラム
vol.88

「さようなら、大好きな伊達市」
Goodbye, My Dear Date

英訳版を見る▶

伊達市に住んで約3年が経ち、7月で伊達市を離れることになりました。

コロナ禍で福島の寒い冬の時期に到着し、初めて日本で社会人としての生活を始めて、最初は大変でした。しかし、多くの人と関わることができ、また皆さんに歓迎して頂き、優しく受け入れていただきました。

そして、少しずつ伊達市の魅力を知っていく内に、いつの間にか惚れてしまいました！伊達市は自然に囲まれて、どの季節も目をそらせないほど美しい景色になります。そのきれいな空気や自然と農家の方の努力のおかげで、人生で一番おいしい野菜と果物を食べられました。そして、よそ者にも関わらず、周りの人たちは温かい笑顔で家族のように接してくださいました。伊達市と皆さんが大好きです。すてきな場所に来て、忘れられない体験ができ、心の底から感謝しています。伊達市の国際交流員になれて、大変誇りに思います。

いればいるほど離れたくないですが、伊達市を私の第二のふるさととして一生大切にしていきます、きっとまたいつか戻ると思います！その時はまたよろしくお願いします。今まで本当にありがとうございました。また会える時まで！（ララ）

地域の魅力
ふる里再発見

『蚕種銘鑑』と伊達の蚕種屋さん

令和6年度第1回企画展
伊達のお蚕用具展
9月23日㈪㊗まで
伊達市保原歴史文化資料館

中井閑民は文化十年（1813）梁川に生まれました。江戸時代末期の伊達郡には、蚕種（蚕の卵）を製造販売する蚕種屋が数多く存在していました。閑民は万延元年（1860）に『蚕種銘鑑』を発刊し、郡内の優良蚕種銘柄と蚕種屋を紹介しています。

閑民は同書発刊の目的を、序文で、次のように述べています。

『伊達郡は蚕糸業に最適な土地柄であり、昔から優良蚕種を製造してきた。遠方の諸国から多数の蚕種買付け商人が来訪している。「悪種」（粗悪蚕種）を製造販売する蚕種屋の存在は、長年の憂いになっていた。そこで、「善種」（優良蚕種）の銘柄を掲載した、世間の人々が必要とする蚕種屋の名簿を発刊することにした。』

その序文によれば、同書は蚕種屋と来訪する蚕種買付け商人のために、発刊されたことが分かります。

梁川村では、石井仙蔵・関東屋清左衛門・大竹惣兵衛・中村屋佐平治など51家が「善種」銘柄とともに掲載されています。伏黒村では、佐藤与惣左衛門・佐藤孫左衛門・小野五兵衛・宍戸藤作など27家です。

口絵には、蚕種屋の居間が描かれています。蚕種紙（蚕種を産み付けた厚手の和紙）を挟んで、主人と蚕種買付け商人が商談中です。主人の背後には蚕種紙を釣るして置く蚕種紙掛けがあります。

安政六年（1859）横浜が開港し、大量の蚕種・生糸が欧米に輸出されました。慶応三年（1867）閑民は蚕種輸出のために、滞在していた横浜で逝去しました。

「奥州本場蚕種売買之図」

にじいろのだて（男女共同参画に関するさまざまな用語を紹介）

『固定的性別役割分担意識』…「男は仕事、女は家庭」のように、性別で生き方を固定的にとらえようとする意識のこと。個人の活躍の場を狭めることにつながります。